

シリーズ

人権を
学ぶ場を
つくるとは②



多様な意見は宝物!

思いがあるからこそ柔軟にむきあえる

Facilitator's LABO <えふらぼ>、VAW研究会 くりもと あつこ 栗本 敦子さん

ワークショップでは、参加者一人ひとりの主体的な動きや感じ方、意見の表明を大切にしています。お互いの違いを認めあい多様性を尊重するということがそのものが、人権を学ぶ場に求められるあり方だといえるでしょう。

参加者がどのように感じどんな意見を持つかは、ワークショップが始まってみないとわかりません。それが実践にあたっての大きな不安となっているようです。実践に向けての一步をふみだすために、多様な意見をどう扱うか、考えてみたいと思います。

■「まとめる」ではなく「ともに考える」

「予想もしなかった反応が出てうまくまとめられなかったら」「もっていきたい流れにそった意見が出なかったら」—こうした不安をよくききます。

ワークショップにはねらいがあり、ファシリテーターはともに学び考えたいことを明確にもっています。しかし、それは答えや結論を用意し、そこへ誘導することではありません。

“facipulate”^{ファシピュレイト}という言葉があります。「意図的に誘導しよう (manipulate: あやつる、操作する) という意図を持ってファシリテート (facilitate) すること」という意味です (※)。参加者の意見や意思を尊重するように見せかけて、実は予定された結論へと誘導することを指していて、ファシリテーターが陥りがちな状態を皮肉った言葉です。

自分が導きたい結論につながるような意見ばかりをとりあげていたら、「自由に意見を言ってください」という言葉とは矛盾したメッセージ、つまり「ファシリテーターが望むような“答え”を言わなければならない」というメッセージを参加者は敏感に感じとるでしょう。そこには参加者の気づきはありません。

ファシリテーターが伝えたいこと・共有したいことは、まとめや結論として提示したり、“落としどころ”としてもっていたりするゴールではなく、その場にいる人とともに考えたい出発点なのです。ファシリテーターが人権に取り組むうえで大切だと思っていることがある。それを参加者自身が自分のものとして考え、他の参加者との相互作用の中で深めていけるように、働きかける。そこで共有されたものから、共通理解や相違点を整理し、社会的な到達点を確認し、これからの課題と解決につなげていく。それがワークショップなのです。

ファシリテーターがすべきことは、ともに考えたいことを明確にし、アクティビティを工夫し、思考をうながし話し合いが活性化するよう働きかけることです。それが結論ではなく過程を大切に、ということでしょう。

伝えたい、ともに考えたいと思うことには理由があるはず。その理由をファシリテーター自身がふりかえり、参加者の意見をききながら、ともに考えていく。それはとても刺激的でわくわくすることです。だからこそ、参加者からの思いがけない意

見は、不安材料ではなく、新たな学びや発見のヒントになるのです。

■非難ではなく問いかけを

人権のワークショップをすすめるうえで、「自由に意見をだしてもらおうといっても、偏見にもとづく意見や、差別的な発言があったら…」という懸念が出されることがあります。

そうした言動が出てこない工夫をしても解決にはなりません。なぜなら、言語化されていないから偏見や差別的な意識がない、というわけでは残念ながらないからです。人権を語るうえでタテマエをふみこえた意見が出たのですから、ワークショップの場として、どのように扱えばともに学ぶことにつながるかという視点で考えてみましょう。

ともに考えようとするならば、「正しいか間違っているか」「事実かそうでないか」という判断は、相互理解の壁になります。ファシリテーターが問題を指摘したとしても、その人は自分にとって「正しいこと、事実であること」を主張するばかりで、学ぶどころか、かたくなに心を閉ざしてしまうでしょう。

相互理解に必要なのは、「なぜそう思うのか」という問いかけです。問題だと思ふ発言があったら、「なぜ」を問いかけることです。それは自分自身にも、「なぜ問題だと思ふのか」という問いとして返ってきます。「自由に意見をだしてもらおう」ことは、ただ“なんでもあり”ということではないのです。何に違和感もち、問題として取り上げるのか。それはファシリテーターとして何を大切にしたいと思っているのか、さらに言えばどんな社会をめざしたいと思っているのか、ということ問われることでもあります。どのような発言に反応するのか。その発言をどう扱うかは、人権尊重をめざすファシリテーターとしてのメッセージなのです。

ワークショップの場にはさまざまな参加者がいます。一人ひとりの参加者の力、そしてその相互作用の力を信頼し、ファシリテーター自身もともに学ぶ姿勢をもって臨めば、より深くリアルな学びが生まれるはず。

ただし、その発言が誰かを傷つけようという意図がある場合は別です。場に責任を持つファシリテーターは、より積極的に毅然とした介入をする必要があります。その姿勢は、人権侵害にどうむきあうかを示すことでもあります。こうした明確な判断を示すことと、中立の立場を保つことはどう両立するのか。次回はファシリテーターの立場性について考えたいと思います。

※「参加型ワークショップ入門」(ロバート・チェンバース著、野田直人監訳、明石書店、2004年) 27ページより

このシリーズの内容にかかわっての経験談や、ご意見をおきかせください。今後のシリーズのなかで、皆さんと一緒に考えていきたいと思ひます。(送付先は本誌12ページ参照)